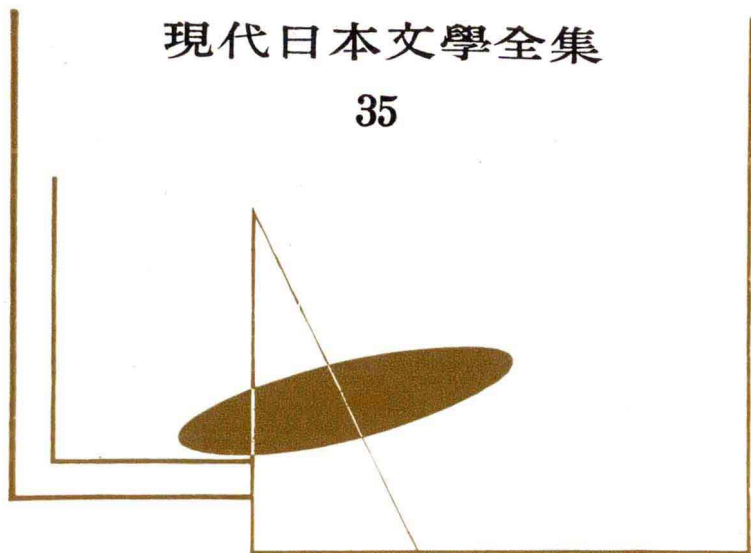


宮本百合子 集

現代日本文學全集

35



筑摩書房版

宮本百合子集

昭和二十九年八月十日 印刷
昭和二十九年八月十五日 發行

著者 宮本百合子

發行者 古田晁

印刷者 山田一雄

發行所 筑摩書房

電話小石川(92)五・七〇一
振替 東京 一六五七六八

本文紙 三菱製紙株式會社
クコース 日本タロス工業株式會社
印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 鈴木製本所

宮本百合子集 目次

貧しき人々の群	五
風に乗つて來るコロポックル	四三
心の河	五五
一本の花	六七
伸子	八六
小祝の一家	三三七
乳房	二四七
おもかげ	二六五
廣場	二七一
三月の第四日曜	二八一
播州平野	二九五

新しきシベリアを横切る	二六二
冬を越す蓄	二七〇
マキシム・ゴーリキイの發展の特質	二七四
歌聲よ、おこれ	二八三
結 集	二八六
幸福について	二八七
誰のために	二九三
新しいアジアのために	二九六
平和の希ひは嚴肅である	二九七
願ひは一つにまとめて	三九八
若き僚友に	四〇〇
彼女の新しくもたらしたものについて (中野重治)	四〇三
解 説	四〇九
年 譜	四一七

装 幀 恩地孝四郎

宮本百合子集

けふも明日も

地球はまはってゐる

そして歴史は進み

つゝある

抑へづたい事實の上に。

一九五〇年三月百金子

貧しき人々の群

序にかへて

C先生。

先生は、あの「小さき泉」の中の、

「師よ、師よ

何度倒れるまで

起き上らねばなりませんか？

七度までですか？」

といふ、弟子の間に對して答へた、師の言葉
を御覺えでございませうか？

「否！

七を七十乗した程倒れても

なほ汝は起き上らねばならぬ」

といはれて、起き上り得る弟子の尊さを、
この頃私は、しみじみ感じてをります。

第一、先づ倒れ得る者は強うございませう。

倒れるところまで、ゲン、ゲンと行きぬ

ける力を、私はどんなに立派な、また有難

いものだと思つてゐることございませう。

今度倒れたら、今度こそ、もうこれつぎ

り死んでしまふかもしれない。

が、行かすにはゐられない。行かすには
すまされぬ心。

ほんたうにドシドシと、

ほんたうにドシドシと、眞の

「自分の足」で歩き、眞の「自分の體」で倒
れ、また自ら起き上られる者の偉さは、限
りなく畏るべきものではございませうまいか。

まだ心の練れてゐない、臆病な私は、も

しや自分が、萬一倒れるかもしれないこと

を怖がつて、一尺の歩幅で行くところを、

八寸にも七寸にも縮めて、ウジウジと意氣

地なく、探り足をしいしい歩きはしまいか

といふことを、どれ位恐れてゐるでござい

ませう。

私は、もう二足踏み出してをります。そ

の踏み方は、やがて三度目を出さうとして

ゐる今の私にとつては、決して心の踊るや

うに嬉しいものではございませう、またも

とより満足なものでは勿論ございませぬ。

けれど、どうでも歩き廻らずにはゐら

れない何か、自分の裡に生きてゐるので

ございませう。

たとへよし、いかほど笑はれようが、く

さされようが、私は私の道を、ただ一生懸

命に、命の限り進んで行くほかないのでご

ざいませう。

自分の卑小なことと自分の弱いことに、

いつもいつも苦しんでばかりゐる私は、一

體何度倒れなければならないのか？

それは解らないことではございませう。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者に

なりたうございませう。地響を立てて倒れ得

る者になりたうございませう。そして、たと

へどんなに傷はついても、また何か掴んで

起き上り、あの廣い、あの窮りない大空を

仰いで、心から微笑出来たとき！ そ

の時こそどうぞ先生も、御一緒に心からう

なづいて下さいませ。

一九一七年三月十七日

著者

村の南北に通じる往還に沿つて、一軒の農家
がある。人間の住居といふよりも、むしろ何か

の巢といつた方が、よほど適當してゐるほど穢

い家の中は、窓が少いので非常に暗い。

三坪ほどの土間には、家中の雜具が散らかつ

て、梁の上の暑さうな鳥屋では、産梅にゐる牝

鶏のクククククと喉を鳴らしてゐるのが聞え

る。

壁際の下つてゐる鶏用の丸木枝の階子の、糞

や抜け毛の白く黄色くついた段々には、瘦せた

雄鶏がちよいと止まつて、天井の牝鶏の番をし

てゐる。

すべてのものが、むさ苦しく、臭く貧しいう

ちに、三人の男の子が爐邊に集つて、自分等の

食物が煮えるのを、今か今かと、待ちくたびれ

てゐる。

或る者は、頭の下に敷いた一方の手を延して、

燃えかけの枝で、とろくなつた火を掻きまはして、溜息を吐く。或る者は、さも待遠さうに細い足をバタバタ動かしながら、まだ湯氣さへも上らない鍋の中と、兄弟共の顔を、盗み視てゐる。けれども誰一人口をきく者はなく、皆この上ない熱心さで粗野な障を輝かせながら、ただ目前に煮えようとしてゐる薯のことばつかりを考へてゐるのである。

遅しい想像力で、やがて自分等の食ふべきものの、色、形、臭ひを想ふと、彼等の眠つてゐた唾腺は、急に呼びさまされて、忽ち舌の根にはジクジクと唾が湧き出し、頬ぺたの下の方が、泣きたいほど痛くなる。彼等は、頭が痛いやうな思ひをしなげら、折々ゴクリ、ゴクリと喉を鳴らし合つてゐた。

子供等は年中腹を空かしてゐる。腹が張るといふことを曾てちつとも知らない彼等は、明けても暮れても「食ひたい食ひたい」といふ欲にばつかり攻められて、食物のことになると、自分等の本性を失つてががつする。

今も彼等三人が三人、皆同じやうに「若し俺ら獨りで、こんだけの薯が食へたらなあ」と思ひ、いつもはゐなければならぬ兄弟共も、こんなときには何といふ邪魔になることかと、しみじみと感じてゐたのである。それだもんで、いつの間にか鶏共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でもつたいたなくすると目が潰れるぞと、かたく戒められてゐる米粒を、拾ひ食ひしてゐるのなどに、氣のつかう筈はな

かつた。

鶏共と子供達とは、てんでに自分等の食物のことばかりに氣を奪はれてゐたのである。

ところへさつきから入口の所で、ジイッとこの様子を眺めてゐた野良犬が、何を思つたか、いきなり恐ろしい勢ひで驟のやうに、鶏の群へ躍り込んだ。

珍らしい米の味に現をぬかしてゐた鶏共は、この意外な敵の來襲に、どのくらゐ度膽をぬかれたことだらう！ コケッココッココッココッコケケケケコッココッココッコといふ耳を刺すやうな悲鳴、バタバタバタバタと空しく羽叩きをする響などが、家中の空氣を動搖させ、静まつてゐた塵は、一杯に飛び擲がつた。

あまり騒動が激しいので、かへつて犬の方がまごついてしまつて、濡れた鼻で地面をこすりながら、ウロウロとそこいら中を、嗅ぎまはつた。

横に垂れ下つた舌や、薄い皮の中から見えてゐる肋骨が、ブルブル震へたり、喘いだりしてゐるのである。

この不意の出來事に、子供等は皆立ち上つた。そして、一番年上の子は、火の盛に燃えついてゐる木株を爐から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げつけた。投げられた木株はヘラヘラ焔をはきながら、犬の後足の直ぐのところ、に、大きな音と火花を散らして轉けたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は體を長く延して、一飛びに戸外へ逃げ去つてしまつた。

木株の火は消えて、フーフーと、激しい煙が立ちはじめた。

この小さい騒ぎを挟んで、彼等の待遠い時は、極めてのろろと這つて行つた。

けれども、やうやう鍋の中から、ゲツグツといふ嬉しい音がし始めると、皆の顔は急に明るくなり、微笑した眼が幾度も幾度も蓋を上げては、覗き込んだ。

これから暫くすると、一番の兄は、まだ朝の食物があつちこつちにこびりついてゐる椀を持つて來て、爐の邊に並べた。これから、このホコホコと心を有頂天にさせるやうな香りのする薯が分けられようといふのである。

一つ二つ三つ四つ。一つ二つ三つ四つ。

彼は順ぐりに分けてゐたが、不意に、前後を忘却させたほど強い衝動的な誘惑にかられて、皆の顔をチラッと見ると、弟達のへ一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つだけだけい投げ込んだ。そして、何氣なく次の一順を廻り始めようとしたとき、

「兄にい、俺らにもよ！」

と、そのときもらふ番の弟が、強情な聲で叫んだ。後の者も、眞似をして椀をつきつけながら、兄に迫つて行つた。兄は、自分の失敗の腹立たしさに、口惜しさうな顔をしながら、突き出された椀の中に、小さい一切れをまた投げ込んでやつた。けれども、初めに見つけたすぐ下の子は、兄のと自分のとを、しげしげ見くらべてゐた後、

「俺ら厭んだあ！お前の方が太つてらあ」と云ふなり、矢庭に箸をのばして、兄の椀からその太つた丸いのを、突き刺さうとした。

物も云はせず、その子供の顔は、兄の平手で、三つ四つ續けさまにぶたれた。彼は火のつくやうに泣き出した。そして、齒をむき出し、拳骨をかためて「薯う一つよけいに食ふべえと思つた奴」にかかつて行つた。

それから暫くの間は、三人が三巴になつて、泣いたり喚いたりしながら、打つたり蹴つたりの大喧嘩が續いた。しまひには、何のために、どうしようとしてこんなに大騒ぎをしてゐるのかも忘れてしまつたほど、猛り立つてつかみ合つたけれども、だんだん疲れて來ると共に、殴り合ひもいやになつて來た。氣拔けのしたやうな風をしながら、めいめいが勝手な所に立つて互ひに極りの悪いやうな、けれどもまだ負けらんぢやねえぞと威張り合ひながら、いつの間にかこぼれて、潰れたり灰にころがり込んだりしてゐる大切な薯を見つめてゐた。

皆、早く食べたい、拾ひたいと思つてはゐるのだけれど、思ひきつて手を出しかねてゐると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけたやうな小聲で、

「俺ら食ふべ」

とこぼれたものを、拾ひ始めた。

これを機に、ほかの者も大急ぎで拾つた。

そして、また改めて數をしらべ合ふと、今はもうすつかり氣が和らいで、かけがへのない一

椀の質物を出来るだけゆるゆると、しやぶりに始めたのである。

これは、町に地主を持つて、その持畑に働いてゐる、甚助といふ小作男の家の出來事である。

二

ちやうどそのとき、私は甚助の小屋裏の畑地に出てゐた。ブラブラ歩いてそこまで來ると、

思ひがけず子供等の様子が目についたので、傍の木蔭から非常な興味を持つて、眺めてゐた。

そして薯のことから、喧嘩からすつかりを見てしまつたのである。初めの間は、私はただ厭なものだ、あさましいものだと思つてゐたけれども、だんだん恐ろしいやうになり、次で、たま

もなく可哀さうになつて來た。彼等に對して一切れの薯は、どれほど勢力を持つてゐるものか。

若し私に出來ることなら、うんと厭になるほど御馳走を食べさせて遣りたいといふやうな心持も起つたけれども、たうとう、私はどうしてもあ

の子供等と近づきになつてみようといふ激しい好奇心に、すつかり打ち負かされてしまつた。

私は、さつさと獨りで入つて行かうともしたが、何だかばつが悪い。

向うがいくら子供達でも、何だか極りが悪いで、私は誰か來て私を連れてつてくれればと思ひながらぼんやりと立つてゐた。裏口からは、

子供達が口の中で薯をころがしたり、互ひの椀の中を覗き合つたりしてゐるのがすつかり見える。

ちやうど好い鹽梅に、そのとき甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度つづ子供ばかりで留守居をしてゐる所を見廻つてゐる婆が、いつものやうに、手拭地のチャンチャン一枚で向うから來た。

私は早速婆にたのんだ。そして、初めて甚助の家へ入つてみたのである。そこいら中は思つたより穢く臭かつた。

私が戸口の所に立つて、内の様子を眺めてゐると、婆は、げげんな顔をしてジロジロ私の方ばかり見てゐる子供達に、元氣の好い聲でいろいろ世話を焼いてやつてゐる。

「ちゃんは今日も野良さ行つたんけ？おとなしく留守をしてろよ。また鐵砲玉（駄菓子）買つてくれつかんな」

そして黙り返つたまま、婆が何と云はうが返事をしようともしない子供達に、何か云はせようとしきりに骨を折つても、頑固な彼等はただ、臆面のない凝視をつづけてゐるばかりで一言も

口をあかうともしない。皆が、憎いやうな眼をして私ばかり見てゐるので、だんだん私は來ちやあ悪かつたのかしらんといふやうな心持ちになつて來た。

婆は、しきりに氣の毒がつてかれこれとりなしにかかつて、子供等是一向そんなことには頓着なく婆がいゆる「せうし（恥し）がつてみませんだ」といふ沈黙を續けてゐる。

私には、なぜ子供等がこんなに黙り返つてゐるのかいつかう譯が分らなかつた。それで、幾

分蹴落されるやうな心持ちになりながらも、しひて微笑をしながら、

「父さんや母さんは？ 淋しいだらう？」

と、一番大きい子にいふと、いつの間にか私の後に廻つてみた中の子が耳の裂けさうな聲で、「ワーッ！」

とはやし立てた。

私は非常に驚いたと同時に、胸がムカムカするほど不愉快を感じた。けれども、もう一度私は繰返してみた。

「淋しいだらうね、だあれもゐないで」

腹は立つたけれども、私にはまだ彼等を憫むくらゐの餘裕はあつた。年中貧しい暮しを、むじめに育つてゐる子に、優しい言葉の一つもかけてやりたかつたのだ。が、それにも拘らず、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ」

といふ、思ひがけない怒罵の聲が、私の魂を動揺させる鋭さで投げつけられたのである。

私は目の奥がクラクラするやうに感じた。

一瞬間に、今まであつた總てのことが皆嘘だつたやうな氣もする。

私は、何をどうすることも出来ずにただ立つてみた。けれども、心が少し静まると、ドイツとしてゐられないほどに不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立つて、非常に不調和な感情の騒亂は、肉體的の痛みのやうに、苦しい心持ちにさせるのであつた。

私は寛容でなければならぬ。彼等から一歩立ちまさつた者の持つ落着きを保ちつつけよう

とする虚榮心が臆病になりきつた心を鞭撻した。けれども空虚になつたやうな頭には何を判断する力もなくなり、齒がガチガチと鳴つてゐる。

この意外な有様に、婆はずつかりとちつてしまつた。そして子供の手をグングン引つぱつて下に坐らせながら私には、詫びるやうな眼差しで、

「行きませすつべなあ、おめえ様。禮儀もなんも知んねえで、はあどうも」

と立ち上つた。私も、もう歸るだけだと思つた。

婆の先に立つて子供等に背を向けたとき、私は自分の上に注がれてゐる憎しみに満ちた眼を思ひ、野獸のやうな彼等の前に、どれほど私は臆病に弱く醜く立ち去らうとしてゐるのかと思ふと、このまま消え失せてしまひたいほどの恥しさに、火のやうな涙が臉一杯にさしぐんで來たのである。

私はしをしをと杉並木の路を歩いてゐた。誰に顔を見られるのも、口を利かれるのも堪らない心持ちでのろのろと足を運んでゐると、いきなり後から唸りを立てて飛んで來た小石が、私の足元で弾んで、コロコロと傍の草中へ轉がり込んでしまつた。

シュウといふ音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねぢ向け見ると、まだすぐ近くの甚助の家の前に、子供等がひしめき合つて立つてゐる。

年上の子供は、私が振向くと、手に持つてゐた小石を振り上げて、威すやうに身振りをした。

私は、子供等の方を見ながらのろのろと杉の木蔭へ身を引きそばめて、二度目の襲撃を防がうとした。

私は、手觸りの荒い杉の太い幹につかまりながら、譚もなく大きな涙をポロポロとこぼしたのである。

三

「何といふことだ！」

あのとぎの様子を思ひ出すと、私の顔はひとりでに眞赤になつた。なぜ私は、あれほどの恥辱を受けなければならなかつたか？ 私が彼等に對していつたことが悪かつたか？ 私は確かに悪いことはいはなかつたといふよりほかはない。私は同情してゐたのだ。ほんたうに淋しいんだらうにと思つてゐたばかりだ。私にはちつとも嘘の心持ちはなかつた。どこからどこまでも正直な氣持ちであつたのではないか？ 私にはどうしても彼等の心持ちは解せない。それ故あの罵りに對しての憤りはより強く深くなるばかりなのであつた。私は、お前方から指一本指される身ぢやあない。人が親切に云つてやつたのに石までぶつけて、それで済むことなのか？

私はほんとにあの子供達が厭であつた。そして、またいつものやうにあのとぎのことがびき村の噂に上つて、小つぽけなをかしい自分が、泥だらけの百姓共の嘲笑の種に引つぱりまはされるのかと思ふと、一思ひに、あのこともある子供達も一まともにして、押し潰してしまひた

いほどの心持ちがしたのである。御飯も食へられないほど私はくさくさした。

けれども、夕方近くなつて、小作男の仁太といふのが来て二時間近くも話して行つたことは、私に或る考への緒口を與へた。

彼は、私共の持畑——二里ほど先の村にある——に働いてゐる貧しい小作男で、その男が來ればきつと願ひ事を持つてゐないことはいはれてゐるほど、困つてゐるのである。

私は彼の衰へた體をながめ、もう何も彼も運だときりだつてゐるよりほかしやうのないやうな話振りを聞くと、フト甚助のことを思ひ出した。甚助はやはりこの仁太のやうな小作男だ。

ああ、ほんとに彼等はこんな氣の毒な小作男の子供達であつたのだ！ この思ひつきはだんだん私の心から種々の憤りやなにかを持ち去つてしまつた。

けれども、後にはよく考へなければならぬ、悲しい思ひが深く根ざしたのである。

あの男の子等は、今まで、その両親が誰のために働いてゐるのを見てゐたのか？

彼等の收穫を待ちかねて、何の思ひ遣りも、容赦もなく米の俵を運び去つてしまふのは如何なる人種であるのか？

實世間のことを少しづつ見聞して、大人の生活が分りかけて來た彼等男の子等の胸は、両親に對する同情と、常に自分等よりはずつとよけいな衣類や食物を持つてゐて、異つた様子をし異つた言葉で話す者共へ對しての憎悪と猜疑で

充ち満ちてゐたのであらう。

俺らが大事の両親に辛い思ひをさせ、涙をこぼさせるのは、あのいつでもその耳觸りの好い聲を出して、スベスベした着物を着て、多勢の者にチャホヤはいはれてゐる者共ではないか？

親切らしく言葉の裏には伏兵のあることを、いつとなく半分直覺的に注入され、「町の人が油断がなんねえぞ」と云はれ云はれてゐる彼等であらうもの、いきなり私が現はれて、優しい言葉をかけたからとて私を信じ得る筈はない。

彼等の頭には先づ第一に僻みが閃いた。「またうめえこといつてけつかる！」で、一時も早くこの小づらの憎い侵入者を驅逐するために、

「おめえの世話になんねえぞーッ！」

と叫んだのであつた。彼等はもう、いはゆる親切は單に親切でないといふことを知つてゐる。貧乏はどれほど辛いかを知り、その両親へ對して生々しい愛情、一かたまりになつて敵に當らうとする一方の反抗心によつて強められた、切なる同情を感じてゐるのである。

臆氣ながら、眞の生活に觸れようとしてゐる彼等に比して、私の心は何といふ單純なことであらう！ 何といふ慮病に、贅澤にふくれ上つてゐることであつたらう！

私はまちがつてゐたのだ。彼等總ての貧しい人々の群に對して、自分は誤つてゐた。

私は親切ではあつた。けれども幾分の自尊と

彼等に對する侮蔑とを持つてゐたのである。そして、自分自身が彼等から離れ、遠のいた者であるのを思へば思ふほど一種の安心と誇り——極く極く小さな氣のつかないほどのものではあつたが——を感じてゐたといふことを偽れようか？

自分を彼等よりは立派だと思つたことは、ただの一度もなかつたか？

勿論、私は意識しながら傲慢な行爲をするほど愚かな心事を持つてゐるとは思はないけれども、長い間の習慣のやうになつて、理由のない卑下や丁寧を何でもなく見てゐたといふことは恐ろしい。

私共と彼等とは、生きるために作られた人間であるといふことに何の差があらう？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基となつて、彼等は貧しく醜く生きてゐるのを思へばどうして侮ることが出來よう。

どうして彼等の疲れた眼差しに高ぶつた瞥見を報い得よう！

私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかつたのである。

世の中は不平等である。天才が現はれば、より多くの白痴が生れなければならない。豊饒な一群を作らうには、より多くの群が饑餓の境にただよつて生き死にをしなければならぬこととは確かである。世が不平等であるからこそ——富者と貧者は合することの出來ない平行線で

あるからこそ、私共は彼等の同情者であらなければならぬ。

金持が出来る一方では氣の毒な貧乏人が出るのは、宇宙の力である。どれほど富み榮えてゐる者も、貧しい者に對して、尊大であるべき何の權利も持たないのである。

かやうにして、私は私自身に誓つた。

私は思ひ返した。
自分と彼等との間の、あの厭はしい溝は速くおほひ埋めて、美しい花園をきつと榮えさせて見せる！

私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた。そして、いろいろな思ひに満たされながら、自分の今日までの境遇を顧みただけである。

私共の先代は、此のK村の開拓者であつた。首都から百里以上も隔り、山々に取り圍まれた小村は、同じ福島縣に屬してゐる村落の中でも貧しい部に入つてゐる。

明治初年に、私共の祖父が自分の半生を捧げて、開墾したこの新開地は、諸國からの移住民で、一村を作られたのである。南の者も、北の者も新しく開けた土地といふ名に誘惑されて、幸福を夢想しながら、故國を去つて集つて來た。けれども、ここでも哀れな彼等は、思ふやうな成功が出来ないばかりか、前よりも、ひどい苦勞をしたければならなくつても、そのときは

もう年も取り、よそに移る勇氣も失せて仕方なし町の小作の一生を終るのである。それ故彼等は昔も今も相變らず貧しい。

そればかりか近頃では、小一里離れてゐるK町が、岩越線の分歧點となつてから、めつつきり總ての有様がちがつて來たので、この村も少からず影響を蒙つた。そして、だんだんと農民の心にしみ込んで來る、都會風の鋭い利害關係の念と彼等が子供の時分から持つてゐる種々の性癖が混合して、毎日の生活がより遺しく、滞りがちになつて來たのである。

村の状態は決して工合が好いとはいへなかつた。長い間保つて來た状態から、次の新しい状態に移らうとする境の不調和が、全體を非常に貧しく落着かなくしてゐるのである。

けれども祖父はもう十七八年前に亡くなつて、ちやうど移住者もそろそろ村に落着いて來、生活が少しづつ榮になつたときの様子ばかり見てゐない。

彼は、大體に満足して、村の高處に家を建て、自分等夫婦はそこに住んで、田地の世話を焼いたり、好きな詩を作つたりして世を終つた。

それで、後に残つた祖母も、故人の志を守つて彼の遺した家に住み、田地を監視し、變遷する世から遠ざかつて暮してゐるのである。

一年中東京にゐた私は、夏になるとK村の祖母の家に行くのを習慣にしてゐた。そして、二月ほどの間東京では想像もつかないやうな生活をしてゐるのである。

私は村中の殆ど總ての者に知られてゐる。東京のお嬢様が來なすつたといつて、野菜だの果物だのを持つて來る者に對して、土産物の一つ一つ配つてやらなければならぬ。朝から小作男の愚痴を聞き、年貢米を負けてやる相談にのる。そして、かれこれいふのが面倒なので、さつさと祖母にすすめて許してやると、大變慈悲深い有難い者のやうに私共を賞めたてゐる。お世辭をいふ。

私は皆にちやほやされながら、朝夕二度の畑廻りをしたり、池の慈姑を掘つたり、持山を一日遊が廻つたり、すつかり地主の馬鹿なお孫さんの生活をしてゐた。誰からも、干渉がましいこと一ついはれず、存分に擴がつてゐたのである。

それでも私は尊さうにされてゐたことなどを思ふのは、今の私にとつてはまことに恥しい。我ながら厭になる。

何としてもどうにかして、村人の少しなりとも利益になる自分にしなければならぬ！

それで、私は心の裡に種々の計畫を立てた。そして、土地の開墾などといふことは——もちろんそこが人間の生活すべきところとして適當であり、また榮える希望もあるところならばよいけれども——冬が長く、地質も悪いやうなところへ、貧しい一群を作つたとしても、やはり非常に尊いことなのであらうかなどといふやうな疑問がしきりに起つたのである。

開拓者自身は、或る程度まで自分の希望を満

たし、喜ばされ、なほその村の歴史上の人物として稱揚されるけれども、はかない移住民として、彼の事業の最後の最も必要な條件を充たしてくれ、澤山の貧しい者共は、どのやうな報いを得てゐるか？

開墾者にとつてはゐなければならなかつた彼等でありながら、二十年近い今日まで彼等はただ同じやうに貧乏なだけである。年中貧しく忘れられて死んで行くだけである。

私は、祖父の時代からの澤山の貧しい者に對して、どうしても何かしなければならぬ。今日まで、すべきことは澤山あつたのに、臆病な自分が見ない振りをして來たのだといふやうな氣のすまなさが、農民に對する自分の心を、非常に謙讓なものにしたのである。

甚助の子が私にいたづらをした次の日であつた。平常より早く目を覺まし、畑地を一廻りして來た私は、ほのぼのと天地を包んでゐる蕃藷色の靄や、裸の足の上に朝露をはね上げて生々としてゐる雜草の肌觸り、作物や樹木の朝明けの薫りなどに、どのくらゐ慰められたことであらう！

非常に愉快な心持ちになつて、女中に笑はれながら、大壺に焚火をしたり、いりもしない野菜を抜いて來たりしてゐると、東側の土間に一人の女が訪ねて來た。それは、甚助の女房であつた。

私に來てくれといふので、出て見ると、働きの着を着て大變にボサボサな髪をした彼女は裸足

で立つてゐる。

女は、私の顔を見ると、

「お早うござりやす。昨日は、はあ俺ら家の餓鬼共が飛んでもねえ御無禮を致しやしたさうでなえ。おわびに出やした。これ！ こけへ出てわびいふもんだぞ——」

と、いひながら手を後に伸ばすと、廣い背のかげから思ひがけず男の子が引き出された。

彼は黙つて下を向いてゐる。赤面もせず、ウジウジもせず、ちつとも母親にたまるやうな様子をしないでつぐねんと立つてゐる。

女は、子供の方へ複雑な流し目をくれながら、しきりに繰返し繰返し勸解してくれとか、自分等の子達は畜生同様のだから、どうぞこらしめにうんと擲つてやつてくれなどとまでいつた。

けれども私は、人あまりあやまられたりすることは大嫌ひである。自分の前にすべてを投げ出したやうにしていろいろいはれると、しまひには、自分が恥しくなつて來る。何だか、いかにも自分が暴君じみてゐるやうに思はれて、いつも母のいふ「いくぢなしのお前」になり終せてしまふ。

今もその辭が出たとともに、もうどの子が何をしたとか憎らしいとかいふことは出來るだけ忘れようとして、また實際氣にもならなくなつてゐるのを、そんなにされることはよけいいやであつた。

で、私が口を酸つぱくして叱るのをやめるといつても、彼女の方ではそれをあてこすりだして

思つてゐるとみえて、だんだん子供にひどくする。

「食うてばかりけつかつてからに、碌なこと一してかきねえ奴だら。これ！ わびしな。勘辨してやつとよ、何とかいひなてば——」

と、子供のを腕をつかんで、小笑いたり何かしても、子供の方でもまた強情なだんまりを守つてゐる。

私には、甚助の女房がどんな心持ちでゐるかよくわかつた。わかつただけに、そんな謂はば芝居を見てゐるのは辛い。

私のいふことなどには耳もかさずに、怒鳴つてゐた彼女は、
「これ！ どうしたんだ？ う？ おわびしねえつむりなんけ？」

といふと、いきなり大きな掌で、頸骨が折れただらうと思ふほど急に子供の首を突き曲げた。

そして、
「どうぞ御免なして下さりやせ」
といふや否や、
「行つとれ！」

と叫んで突きとばした。
私は息がつまるくらゐびつくりしてしまつたけれども、當の母親は満足らしく笑ひながら小腰をかがめて、
「お暇潰れでござりやした」

と畑へ出て行つた。
下女は彼女の後姿を見送るながら、
「甚助さん家のおつかあは利口もんでやすなり

と

え、ちやんと先々のこと考えてる」と嘲笑つた。

五

村の四辻に多勢人立ちがしてゐる。

子供等や、畝を擔いだ男女、馬を牽いた他所の者共まで、賤しい笑ひをたたへて口々に罵り騒いでゐる眞中には、兩手に魚を一切れづつ握つた男が、ニヤニヤしながら足を内輪にして立つてゐるのである。

肩の所に大きな縫裂のある女物の着物を着て、細紐で止めただけでズルズルと下つた合せ目からは、細い脛がのぞいてゐる。

延びたなりで屑絲のやうな髪には、木の葉や葉切れがブラ下り、下脛に半圓の袋が下つて、青白い大きな目玉がこぼれさうに突出てゐる。紫色の唇を押しあげて、黄色い縞のある反つ齒が見え、鼻の兩側の溝には腫物が出来て、そこから一體に赤く地腫れさせてゐる。

身動きする毎に、魚の臭ひや何やら彼やらがごつたになつて、胸が悪くなるやうな臭氣を四邊にまき散らす。彼は「善馬鹿」といふ氣遣ひなのである。もうかれこれ五六年前に、氣が變になつてからは、この村にある家へはよりつかずに、村中を廻つて歩いて、行く先き先きで、筵を一枚貰つてはその上に寝て暮してゐるのである。

どうかして氣に入つたところがあると、幾日も追ひ立てられるまでは、木蔭などにほんや

りすわつて、犬の蚤を取つてやつたり、自分ですわつたまま手の届くだけ草を一本のこさず抜いたりしてゐる。

犬がむしやうに好きで、あはれることなどはちつともないので、村の者共は彼の姿を見かけさへすると捕へて、罪なわるさをするのであつた。

そのときも彼はどこかへ四日も行つてやつと歸つて来たところなのである。彼は大變疲れたやうな氣がしてゐた。すぐそこにくらがりたいやうな心持ちでここまで来ると、友達の犬に見つかつて、早速顔中舐め廻された。それを彼はいかにも嬉しさうにして、だまつて犬の顔を見てゐるところへ、

「善馬鹿！ けえつたんかあ」

と叫びながら五六人の子供等が馳けて來た。そして、たちまち彼の體は暇でいたづら好きの者共に圍まれてしまつたのである。

皆はてんでに勝手な悪口や戯言を彼にあびせながら、手に持つてゐる魚を突ついたり、犬をけしかけたりした。

「う！ 穢て。あげえに犬の舐めてる魚あまた善馬鹿が食ふんだぞ。ベッ！ ベッ！ 狂犬病さおつかつたらどうすつべ」

「ひと馬鹿にしてけつかる。もうとうに狂犬病さかかつてつとよ！ この上へかかるにや命が二ついらあ」

「わはははは。ほんによ。うめえや」

「おつととととと」

人々は急に笑ひ出した。

下等な笑聲の渦巻の下を這ふやうにして、善馬鹿の低い甘つたるい、

「へへへへへー」

といふ聲が飛びはなれて不快に響き渡つた。

「厭んなことしてけつかる」

「そんだら行げよ。おめえにゐて貰はんとええとよ。フフフフ」

「や！ 鮭が落ちんぞ。馬鹿！」

「ははははは」

集つてゐる者共は、下等な好奇心に動かされて、互ひに突き合つたり打ち合つたりして喚きながら、暫くの間大きくなつたり、小さくなつたりしてゐた。

けれども、だんだん人数も減つて來ると、前よりもつといやな顔をした善馬鹿が、握つた鮭を落しさうにしてよろけながら、道傍の樫の大木の蔭まで來ると、赤ん坊のやうにドサンと仰向けに寝た。そして、大口を開いて、鼻をギーギー鳴らしながら寝込んでしまつた。

犬がそろそろと首を伸して、彼の手に持たせたまま片端から鮭を食べ始めると、子供等は彼のした下等な身振りの眞似をしたりしながら、しきりに彼を起しにかかつたのである。

一人の子は「狐のしつぽ」で鼻の穴をくすぐつた。

蹴らうが怒鳴らうが、ゆさりともしないので、

圖に乗つた子供達は善馬鹿を裸體にし始めた。

彼等は掛聲をかけながら、だんだん肌脱ぎにさ

せたとき、いつの間にかそこを去つて、様子を
見てゐた若い者がいきなり、

「そげえなことするでねえぞ。天道様あ罰い
お下しなさんぞ」

と眞面目に口を出した。

皆がつくりして、いたづらの手を止めて男の
顔を見てゐた。すると、中でも一番頭株らしい
十四五の子は、口を尖らして、理窟をこね出し
た。

「わりやあ朝つばちから、おつかあに怒鳴られ
てけつかる癖にして、俺らの世話焼けるんけ？
う？」

「おめえあの人知つてるんけ？」

一人の子がヒソヒソときくと、急にこの子は
得意さうな顔になつて、一層冷笑的な口吻で叫
んだ。

「うん、知つてつとも！」

「水車屋の新さんでだなあ、おめえは。そんで
北海道から、食へなくなつて、おつかあんげえ
戻つて来たんだつて、こんねえだおめえのおつ
かあがいつてたぞ。いくぢのねえ奴だて……」

皆は聲をそろへて笑つた。

けれども、新さんは別に顔色も變へずに、
「考へてからするもんだぞ」

と云ひながら行つてしまつた。

それから一しきり、子供達は腹の癒えるほど
妙な新さんを罵つたけれども、もう一旦やめた
いたづらはまたやる氣にもなれず、肌ぬぎにし
た善馬鹿を、てんでんが、

「俺らの知つたこつちやねえぞ！」
と叫びながら一足つつ蹴りつけて、ちりぢりば
らばらに走けて行つてしまつた。

六

今年六十八になると自分では云つてゐる善馬
鹿のおふくろは、孫と一緒に或る農家の納屋の
やうな所を借りて住んでゐた。

家賃を拂はないで済むかはり、まるで豚小屋
同然な所で、年中蚤や南京蟲の巢になつてゐる。

それでもまだあの狒々婆さま——彼女は顔中
皺だらけの上に白髪を振りかぶり、胸から腰が
曲つて何かする様子はまるで狒々なので皆が彼
女の通稱にしてゐる——にはよすぎるといふほ
ど善馬鹿の一族は、どれもこれも人間らしいの
はひなかつた。

善馬鹿が、まだあんなにならなないで一人前の
百姓で働いてゐた時分に出来た、たつた獨りの
男の子は、これもまたほんたうの白痴である。
女房が愛想をつかしたと、どこかへ逃げ出して
しまつてからは、善馬鹿とその子を両手に抱へ
て、おふくろばかりが辛い目をみてゐるのであ
る。

もう十一にもなりながら、その子は何の言葉
も知らないし、體も育たない、五つ六つの子ぐ
らゐるほかない胴の上に、人なみの二倍もあるや
うな開いた頭がつてゐるので、細い頸はその
重みで年中フラフラと落着いたことがない。そ
して、年中豆腐ばつかり食べて、ほかの物はど

れほど美味しいものであらうが見向きもしな
かつた。

彼は、自分の唯一の食料を、

「たふ」

といふことだけを知つてゐるので、村の者達は
皆何かの祟りに違ひないと云つてゐる。

何でもよほど前のことだけれども、町へ大變
御利益のある女の祈禱者が来たことがあつた。

そのとき狒々婆も白痴の孫を連れて行つて見て
もらふと、その女が云ふには、幾十代か前の祖
先が馬の皮剥ぎを商賣にしてゐたことがあつて、
その剣がれた馬の怨靈の仕業なのだから、十圓
出せば祈り伏せてやるとのことだつたさうだけ
れども、婆にその金の出せよう筈はない。それ
で、拂ひ落してもらふことは出来ず、またもう
それつぎ醫者にもかけず、自分できつて出來る
だけは忘れるしがくしてゐた。

このやうな有様で、狒々婆はいやでも應でも
食ふだけのことはしなければならぬので、他
家の手傳ひや洗濯などをして廻つてゐる。そし
て、三度の食事は皆どこかですませて、自分の
家へはただ眠るだけに歸るので、村中からいや
しめられて、何ぞといつては悪い例にばかり引
き出されてゐた。

可哀さうがられるために、自分の年も二つ三
つは多く云つてゐるときへ噂されてゐるのであ
る。

私は、たださへ貧乏な村人のおかけで、やう
やくどうやら露命をつないでゐる婆が氣の毒で

あつた。境遇上さうでもしなければ外に生きやうがないのだから、ただ馬鹿にしたり酷く云つたりすることは出来ない。もうよほよほになつて先が見えてゐるのに、朝から晩まで他人の家を廻つて、気がねな飯を食はなければならぬのを思ふと可哀さうになる。

で、私は出来るだけ婆に用を云ひつけて、食事などもさせ、ちよいちよい古い着物や何かをやつた。彼女は私に對して好くは思つてゐるらしいけれども、ひどく貧乏で、恥も外聞もない慾張りな様子が少からず私には氣持ち悪かつた。食べる物でも、膳にのせてやつたものばかりでなく、残り物があつたらどうせ腐るのだからくれると、ぐんぐん持つて行く。そんなときに、もしやらないなどと云はうものなら、もうすつかり不機嫌になつてボンボンろくに挨拶もしないで歸つてしまふのである。新しい着物でも着てみると、一つ一つ引つばつてみないでは置かない。

そんなことがほんたうにたまらなくいやであつたけれども、私は、貧しい者のうちに入つて行かうとしながら屈振つてゐる自分を叱り叱りしてやうやう馴れるまでに堪へたのである。

善馬鹿のおふくろが、今までより屢々出入りするやうになると共に、だんだん村中の貧しい中でも貧しい者共に接する機會が多く與へられるやうになつた。

親父は酒飲みで、後妻は酌婦上りの女で、娘は三年前からの肺病で、もう到底助かる見込み

はないと云ふやうな桶屋の家族。

中氣で腰の立たない男と鬻の夫婦。

それ等の、絶えず愚痴をこぼし、みじめに暗い者の上に私はそろそろと自分のかすかな同情をそそぎはじめたのである。

もとより私のすることは實に小さいことばかりである。私が力一杯振りしほつてしたことであつても、世の中のことに混れば、どうなつたかわからなくなるやうなものであるのは、自分でも知つてゐる。

けれども、私は愉快であつた。自分は彼等のことを思つてゐるのだといふことだけで、私はかなりの快さを感じてゐたほどである。

毎日毎日私を、新しく見出した仕事に没頭して、満足しながら過してゐたのである。

けれども、たつた一つ私にはほんたうに辛いことがあつた。それは、善馬鹿の子の顔を見ることである。誰も遊び相手もなく、道傍の木になどよりかかりながらしよんぼりとたたずんでゐる様子を見ると、ほんたうに私は苦しめられた。

何とか云つてやりたい、どうにかしてやりたい。私はほんたうにさう思ふ。

が、彼の瘦せた體や、妙に陰慘な表情をした醜い顔を見ると、何もしないうちにもう、堪らない妙な心持ちになつて来る。

彼の眼つきはすつかり私を恐れさせる。私は、彼の傍を落着いて通ることさへ出来ないのではあ

つた。

何だか今にも飛いて頸を締められさうな氣がする。そして、エソコと出来るだけ彼の目から避けて通り過ぎながら、心の裡には自分が何か彼にしなければならぬと云ふ感情と、この上もない氣味悪さが混亂した、大嵐が吹いてゐるのであつた。

萬一どんなか方法によつてこの白痴だと思はれてゐる子の裡から、何かの輝きが見出される筈であるのを、傍の者が放擲してしまつたばかりで、一生闇の世界で終つてしまふやうなことがあれば、ほんとに恐ろしいことである。

今まで死なないところを見れば、どこかに生きる力は持つてゐるのだ。

十一年保つてゐた命の力は大きいものである。ましてここいらの、ほんとに人間を生長させるには不適當なやうな總ての状態にある所では殊にさうである。

空想ではあらうけれども、私は彼の靈と通つてゐる何か必ず一つはあるだらうといふことを思ひ、それに對しての彼は聰明なのぢやあないかなと思つた。

彼の親父は人間の仲間では氣遣ひである。けれども犬と彼とはどれほど仲よく互ひに心を感じ合つてゐることか。

白痴の心は私にとつては謎である。分らないれば分らないほど、私は何かありさうに、どうにかなりさうに思はずにはゐられなかつたのである。